城踏 SHIRO FUMI

姫路市立城郭研究室ニュース「城踏」No.52　2004年10月１日
編集・発行；姫路市立城郭研究室
〒670-0012　姫路市本町68-258　日本城郭研究ｾﾝﾀｰ内
TEL　0792-89-4877　FAX　0792-89-4890
URL　http://www.city.himeji.hyogo.jp/jyokakuken/

陸（おか）の城に潮の流れる

安東氏については「城踏」19号ですこし触れたことがあります。この安東氏に関わる遺跡の一つ脇本城跡（秋田県男鹿市）が国の史跡に指定されることになりました。

この城は蝦夷島を含む日本海北部に勢力を張った安東氏の居城として造られたもので、日本海交通の要衝に位置するとされ（『月刊文化財』491号）、まさに「海の城」と呼ぶべきものでしょう。安東氏がこのような勢力だったとすると、脇本城も含めて沿岸部に「海の城」というものがいくつも築かれたことが考えられます。ただし、脇本城跡の発掘調査成果からすると、安東氏の時代の遺物は相対的に少なく、それ以外の時期の遺物の方が多かったり、安東氏以前からここが何らかの施設として利用されていたことがわかってきました。となると、一体誰がここに城を築いたのか、ということになってきます。それらについては、今後の本格的な調査によって解明されることが期待されます。

さて、「海と城の中世―小鹿嶋、脇本城」と題したシンポジウム（2004.9.25～26）では、そうした脇本城に関する調査成果の報告のほか、日本海北部における交通路と城について議論がされました。その中で興味深かったのは中田書矢「津軽西浜の城と湊―戦国期の状況」という報告で示された種里城（青森県鰺ケ沢町）でした。

レジメによると、この城は15世紀末期に津軽氏の遠祖南部光信が築いたものとされます（以下、津軽氏とする）。下の地図もそのレジメから転載したものですが、●が種里城の位置になります。ご覧のように海からは８ｋｍほど離れ、近世に栄えた鰺ケ沢湊とはさらに離れています。そして光信が種里で亡くなると、本拠は大浦城（岩木町；以後、津軽氏を名乗るまで大浦氏というのはこの城に拠るため）、堀越城（弘前市）、弘前城へと移るそうです。こうした事実から報告者は、津軽氏が西浜に勢力を拡張していく中で、「海の城」との関わりが見えてこないことに触れていました。

確かに、安東氏が南部氏に逐われて津軽地域で勢いが弱まり、当該地域を押さえるために光信が入り、安東氏の海からの攻撃に備えて種里に築城した（堀越城跡発掘調査会『堀越城跡』1978）とする見方もあります。

「中村家由緒書」に「西之浜之内中村江狄蜂起之由早々罷越追討可仕旨仰付　天正九年三月罷越追討仕候　依之知行二百石被下置（中略）其後中村を派チ可申旨被仰付　夫より中村成就仕候」とあるのに注目すれば、どうも西浜海岸沿いにはアイヌの集落があるため（江戸時代の陸奥国絵図には海岸沿いに狄村の記載がある）、そこに津軽氏が進出しようとすれば「蝦夷荒」を惹起したらしい（長谷川成一「本州北端における近世城下町の成立」『海峡をつなぐ日本史』三省堂、1993）。西浜進出にはアイヌの既得権を侵すことがあったのでしょう。また、前頁図中の黄線は「奈良家累代家記」によれば、「光信公諸用アリ　海岸ニ御通行ノ節　館前ノ城主及萩館ノ城主狙撃スルニ依リ」開かれた山道ということです。西浜に向かうには既存の交通路さえ自由に通行できなかったことが記されています。狙撃してきた城主のいる館は種里よりも海寄りで赤石川両岸にあります。この川の刻む谷は古くから開発された土地（『光信公の館図録』1992）らしいので、“スナイパー”城主は開発者の子孫かもしれません。「奈良家累代家記」ではこのあと彼らは光信の手勢によって討たれたことになっています。光信の西浜進出には「蝦夷」だけでなく、こうした在地勢力との武力対決が不可避だったことが推察されます。

発掘調査による遺物の出土状況は16世紀前半に始まり、ピークは16世紀末から17世紀前半で、後半には消滅するとのことです（中田前掲）。これは左記の光信の話とは若干違和感があります。

光信は大永６年（1526）に種里城で死亡します。その廟所が城跡内にあります。その後は居城を津軽平野中央部へ移すことは前述の通りです。それは津軽氏にとって南部氏との熾烈な抗争が原因と考えられます。事実、この抗争を乗りきったことで為信の代に津軽氏は大名として独立するわけです。それでも光信を津軽氏の始祖と仰ぎ（『津軽一統志』）、種里が弘前藩にとって聖域化される（中田報告）のは、拡大解釈すればそれだけ西浜への進出が津軽氏戦国大名化の過程で画期になったこと、もしくは象徴的な出来事にしたかったということなのでしょうか。夷狄を払い夷に備えることを責務と自己認識する近世大名津軽氏が、その始まりを「蝦夷荒」を平定した光信に求めた（長谷川「近世東北大名の自己認識」『東北の歴史再発見』河出書房新社、1997）とするなら、種里城が津軽氏の西浜進出の道程にあるとしても、光信の拠った城だったということがより重要になってきます。近世史料と地理的位置関係から、種里城とそれに関連する城館に「海の城」との関わりを可視的に浮かびあがらせるのは難しそうです。

津軽氏が安東氏やアイヌと争い、外浜や西浜へ進出したのは北方世界との交易を押さえようしたことは間違いないでしょう。安東氏の「海の城」だけでなく、津軽氏のそうしたネットワークの広がりも今後の研究に期待したいところです。

さて、『永禄日記』（みちのく双書第１集）慶長15年３月５日の条には弘前城築城の記事が書かれていますが、その中に次のような記述があります。

> 此所元ハ鷹ヶ岡と申処、御国十三之崎より沖ニ松前迄之間ニ大潮有之、此を尾閭（びろ）と申候由、依而昔より十三之崎を尾閭ヶ崎と申候間、是ハ結構なる名之由ニ付其名を取、此已後弘前と可申由、御沙汰之上之義ニ御座候と申候、但し昔より弘前と申様にも申候

かつて安東氏の拠点であった十三湊と蝦夷地松前の間の潮流に因んで弘前と名付けたというのです。「但し昔より弘前と申様にも申候」と但書を記すように、史実かどうかは怪しいものの、内陸部に位置する居城弘前の名が外浜と蝦夷地の間に横たわる津軽海峡の潮流に由来するというのは、興味深い話ではあります。

南部光信の廟所

種里城の主殿跡